

<札幌> 信教の自由を守る 2・11 札幌集会

新たな国家主義との闘い

今年の「信教の自由を守る 2・11 札幌集会」は新装成った札幌北光教会で開催された。メインプログラムである講演「国家主義と靖国・天皇制問題」で講師佐藤幹雄氏（日本基督教団岩見沢教会牧師）は昨今の新たな国家主義の台頭に警告を發し、これからのヤスクニの闘いは新たな国家主義との闘いであると結んだ。

ナショナリズム（国家主義）の本質を佐藤氏は「個人の人権よりも国家意思を優先する考え」として「国民は、国に従うのが当たり前という考えの根底には、国と国民は一体であるという考えがある」とつなげる。

講演の中で一本のビデオが紹介された。沖縄戦で犠牲となった一般戦没者が遺族の了解もなく英霊として靖国神社に合祀されている。画面に登場する金城実さんの母親は日本軍に壕を追われ砲弾に晒されて命を失った。「国家によって殺された者が何ゆえ国家の英霊とされるのか」と金城実さんはこの不条理を怒る。国民を犠牲にした日本軍＝日本政府に英霊として祀られる道理はないと沖縄の人々は主張して靖国神社に合祀名簿からの削除を求めた。

国民が国家の戦いの犠牲となることは当然であり、国家がその忠義に対して顕彰するのも当然とする国民と国家の関係性の論理こそが国家主義の本質そのものなのである。

「日の丸・君が代」の教育現場への押し付け、教育基本法改悪による道徳教育と愛国心教育の強化など、国家主義教育の強化は確実に進捗しつつある。尖閣諸島、北方領土などの領土問題に加えて北朝鮮情勢や中国の軍備強化などを意図的に喧伝することで危機感をあおり国民のナショナリズムをかき立てる。

国家に従順な国民の育成を意図する国家主義の動向に対して、ヤスクニの闘いの視野はもうひとつ広げられる時機にあることを考えさせられた今年の 2.11 集会であった。